

## 歴史を生きる(1)

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

川口基督教会の150年史を綴るため、編集委員会を立ち上げて作業を進めています。当初は、今年の11月に行う予定の記念礼拝に合わせて「記念誌」として発行し、神様に献呈すると同時に、信徒の皆様や来客の方々に差し上げるのを目標にしていました。しかし、コロナ禍の影響や執筆の進捗など諸事情により、発行時期を延期することにしました。ご存知のように、宣教開始150周年の記念礼拝そのものも、来年に延期せざるを得ませんでした。結果として、もう一年という時間を稼いだわけですが、新しい編集委員会では、150周年記念礼拝や様々な行事をも含めて、後世に記録として残すことも視野に入れて、発行時期を再来年(2022年)のイースターと、目標を定めました。

我が教会は、去る1990年に120周年を迎えた際に、故久保淵豊彦主教の力作で出された「川口基督教会のあゆみ(以下120年史)」という宝物を頂いています。この「120年史」は、当時の記録によると、当初の予定を大幅に越えて、3年後の1993年に発行されました。歴史を書くという作業の大変さが窺えます。

牧師の自分としては、川口基督教会の150年の歴史の発端である日本聖公会の黎明期の歴史や、日本への宣教師派遣に至るまでの前史(プレヒストリー)を確かめることで、改めて宣教歴史の全貌を掴むため、幾つかの関連書籍を読みはじめました。中でも、日本聖公会の100周年を迎えた1959年に発行された「日本聖公会百年史」を読み直しています。これもまた故松平惟太郎司祭による力作ですが、読み始めた所、大いに感動しつつ、多くの学びを得ています。そこからいくつか分かち合いたいと思います。

師は、諸言で「この書は全教会から寄せられた好意の結晶で...中略...この書をわが国に『よきことを始め給いし者』と、公会先輩への感謝のしるしとして公刊しますが、これを一つの足がかりとして完備した『日本聖公会史』が出来る準備となれば幸い」と述べておられます。我が教会の150年史も、前の120年史をもとに、より忠実な歴史の記録になると期待します。

そして、この書の目次を見てみると、初期宣教時代(1800年代)からはじめて、伝道時代(明治初期～)、組織時代(明治10年～)、発展時代(明治29=1896年～大正～昭和15=1937年)、受難時代(合同問題と戦時下)、復興時代(戦後)と、時代区分をしています。つまり、1959年の時点で終わっています。今はそれから、さらに70年の歳月が経っています。もし著者の松平司祭がその後の期間を区切って、時代毎のタイトルを付けるなら、どのようになるでしょう。世間では高度成長期を経て～云々となりますが、我が聖公会はこの期間にどのような歩みを進めてきたのでしょうか。

実に、川口基督教会の150年は、この100年の歴史の土台に立っており、最初の100年間は時間的にもほぼ重なっています。「120年史」は、それぞれの牧師の在任期間に区切って書かれているのが一つの特徴ですが、その中身としては、時代毎の課題や流れを表す記述にもなっています。思えば、阪神淡路大震災と聖堂の復元、バブル崩壊と東日本大震災など、120年史以降の30年間は、以前とは質や次元が違う日本社会の激変期の最中でした。また宣教と伝道の課題が多様化・深層化した時期でもあります。

我が教会の150年史は、単なる一つの教会の書にとどまらず、このような時代とともに歴史を生き証人の記録になることと望みます。歴史は、後で書くだけのものではなく、それを生きるものでなければなりません。